091370−001−9

特42−994

籬の菊操鏡

中島　元久／編

上

M13

DBN−2268

特42
994

今日は来て案造あるふと思ひうとこの形光るが言ふよりまかあらぬかも俳諧耕を種迄い義の案と表題も唱案四方より咲百ふ踏み形紙〳〵数田を載たる形信氏が惟村岩陰の墨雲池る貞婦の志探ハ白雪よ孤を侵を寒難辛苦意と義理もの二條の迷〳〵ば思癖る鳥ねを咲きば法きを如の月狐の艶も白雪ちるく芳出を案〳〵再今迄を案に想し歌を様星が画を加〳〵今濃方〳〵は歩〳〵歌のお一冊もたるく後蕾の閑元をば彩〳〵水巻を代りて彩ふ

明治十三年三月

無漏俳諧寄記

亜瓜宛見当
娼妓小半

細川行信

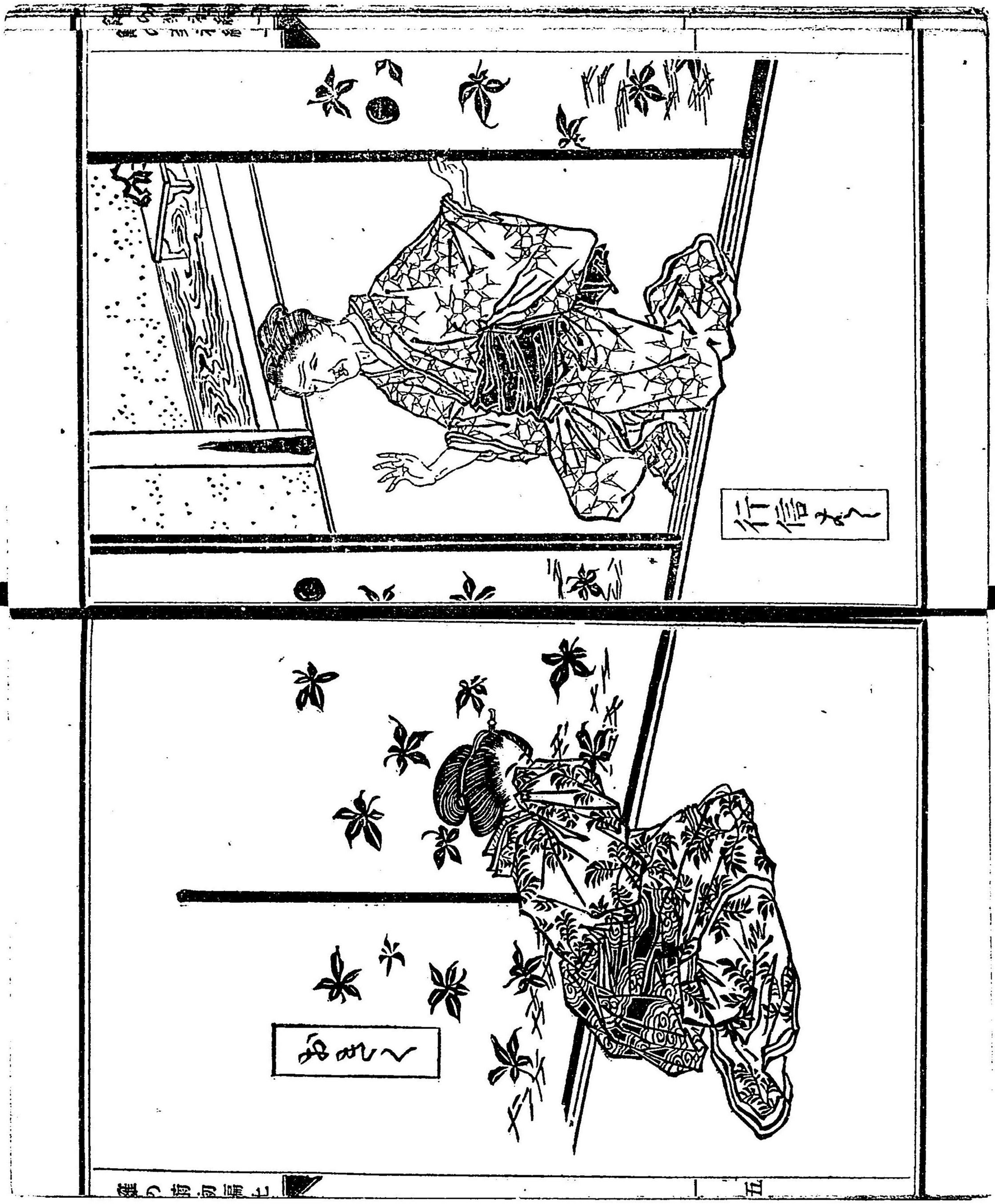
○籬の菊操鏡

移ふも猶白妙の色なれやと頓阿法師のよまれたる籬の菊の夫ならで現今横濱戸部町なる天神山のあたはとりにて辛苦の中にろひ〳〵く所夫の病氣を介抱しまたあせやらぬ白菊の姿貌も見返らずろが本復を身にこのへて神に佛に願事を掛てぞ頼むろの人の來歴如何にと聞紛せゞ舊幕府世盛りの頃三番町ゝ住居して不足といふゝ何一ッ夢ゝも知らで世を送る中里何某と呼ぶ旗下あり夫婦の中ゝ兩人の男の子を設けしかゞ惣領次男の隔てなく何れも文武の道を學ばせ末の出世を老樂ゝいと頼母しく暮すうち尾州家の藩中ゝて細川何某といふ者ゝ藩士でろあれ祿高も多く領する身分といひ殊ゝ内緣ある者もゝ次男行信（三十三）を養子ゝといひ入れたるを幸ひゝ早速承知ゝ旨を答へ頓て同家の惣領娘お菊（三十二）と愛度祝言を濟せて後も聟舅及び夫婦のゝろの中ゝ如何にやあらんと氣遣ひしゝいよ〳〵睦み親しむとの

便よ漸々安心せーんなべての親の情ならん扨行信いろの翌年部屋住より召出され奉職の身とありければ是も養父ご年來の勤功よ依ての事と思へば一層勉強し入てい孝出てい忠と聖の教の兩道を只赤心の一筋よ堅く守つて怠らざるより自然と長上の人々よ頼みある壯年ともてはやされて最負を受け問もなく又も榮轉の命を受けたる行信ご人よ勝れて立身出世を小人のあらひとて日來恩意よ往復する舊同僚の松永大九郎竹田照秀岩本段八などいふ若侍ごのいと妬ましき事よ思ひます〳〵入魂を結ぶとの事よ託付行信を誘引出てい内々よ何ゝ落度を構へんと巧らむ事のしば〳〵なれど此方い疾くより承知して餘儀なく連立つ事なる故例も程よくあやなーつさる淺慮よ奸策よ乗らぬい松永等い遐慮よ思ひある日三人打寄て種々協議を凝した後如何よ怜悧の行信なりとも馴ぬ場所もろ今度ころ思ふ存分恥辱をい與へて是迄我々ごの計略のうらを大膽よもかきー恨みを晴してくれんと尚も手筈を諜し合せ夫より三人連立て行信方へ尋ね行き久し振よてどこぞへ行き一獻汲んと促すを又ゝと心よ思ひーも若氣の常とて行信ごの否まい渠等よ臆せしと笑いれんも殘念と疾よ支度を調へて市ケ谷なる屋敷を立出四谷通りのわる割烹店よて暫らく獻つ酬へつーて互よひ興心ゐたりしご醉よ乗じて松永ご是ゝら一寸新宿へ遊興よ行ふといひ出したを刀の手前夫のみさといつよ替つて岩本ご斷りしより喧嘩とあり一時い拔も合せん樣子よ行信も驚いて竹田とゝも〳〵中へ入り漸々一人を押宥めても松永い承知せず一旦口外ーた上ゑ刀に掛ても武士のいひ分是非とも立て貰いふといひ募られて行信い別て迷惑したなれど今となつてい免れぬ場合としぶ〳〵承知せしゆゑ仕をはせたりと三人が目交で夫と點頭あひ然ば時刻の延ぬうちと遂に内藤新宿の豐倉といふ女郎屋へ四人一座で押上り銘々偶妓を定めたる中にもひとり行信い噂に聞のみ日前見るい今宵が初めての座敷の

大陽氣に外飾の場所といふからい迂濶な事を仕出して恥をのゝてい同僚の前へ對して氣の毒と遠慮がちにて口さへ利ず只默然として居を見て取る此方い思ふ坪と行信を中に取巻き細川氏にい何事もよく辨まへてお在とい兼て支配の方々のら夏蠅い程に承いつたィヤ左樣な野暮い留て元より愚昧の小子ごの及ばぬ所い百も承知ろてを願ふも此座の一興一寸陽氣ょ一拳叅らふ成程夫いよい趣向負た物への盃いオゝある〳〵是ごのいゝと盃洗取て差向れゞ何れへなりとお酌い拙者サァ〳〵早くやりたまへナニ御存じごのないとやら夫い近來御遠慮千萬能ある鷹い爪を隱すハヲ扨も時と場所先生イヤサ細川氏どうしたものだィヤサ行信どのと口々ょ飽迄喇弄して掛るょ扨いうま〳〵渠の手ょ陷落りしゝと爰ょ至つて始めて氣ごの付憎い奴めと勃然として只一刀打と思ひしが場所がらゆゑ汚名を取るも口惜ーと偵ごの思慮ある行信も堪へ兼たる口惜さょ思はず拳を握る處へ間の唐紙を徐ろょ開て此場へ立出ー娼妓小半い朋輩始め一座の客へ會釋しつ私のお客い其樣な意氣な騒ぎい出來ない上お酒もどうやら嫌ひの樣子といひつゝ頓て行信の傍へ立寄りモシ貴郎お苦しさうでありますゝら少と部屋ょて御休息ハテマァいゝから入らつーやいと無理ょ手を取り先ょ立ち皆さんどうぞ堪忍してと莞爾笑ふ愛敬を跡ょ殘して介抱しあごのら廊下傳ひょ行信を己ごの部屋へと連て行く思ひ掛なき偶妓のろの執成ょ三人い是いどうだと顔を見合せ呆れる折柄ドヤ〳〵と入來る新造仲居等ごの貴郎方の偶妓も先刻うらお待兼サァ〳〵早くお部屋へと手取り袖引き無理やりょ設けの臥床へ押入れて其まゝ枕ょ就かせーい同じ初會の客ょても温和と意地の悪いとい扱ひぶりも異ると見ゑ一座をーたる娼妓さへ小半ょ刺みを承引て行信の爲よい樣ょと心を添しょ知られたり斯てろの夜もほの〳〵と明る間近くなりけれゞ彼三人い支度を整へ細川氏いまだ起ぬゝ餘りこいへゞ横着な一寸

起しよ行てくれと煩ふくらして急立るも前夜此事を娘まゝく思つて彼是いふ事と見て取る仲居ゝ可笑さを堪へて漸々眞顔よ為りオヤ皆さんゝお忘れですか那お方ゝ夕べのうち是非歸らぬゞ不都合との仰せよ一應申上て夫からお歸し申しましたといはれてさうと三人ゝ又してもお先走りかいまへまーい二才めだといと不興氣よ立歸りしが少しは是で腹慰せよなつたと見ゐて其後ゝ往來ゝ元より途中よて面會しても行信よ語も更よ掛ずありしと袋よ又行信が遂よろ此身を誤まれる起因といふゝ別儀よあらず既に前にも說く如く最う堪忍も是までと思ひ詰たる危き場所を娼妓小半が計らひで無事よ濟せてくれた上部屋へ連てさま〳〵に諫め宥めて心切に歸してくれしを深く喜び早速行て禮を述んと口錄包みよ土產物を添て翌日行信が新宿の豐倉屋へ出掛て行ゞ仲居ゝ出迎へオヤ貴郎ゝ昨夜のお客ようてろお出になりましたまづ〳〵是へと案內されかれ見通しへ通る間も此方ゝいとゞさまり惡く漸々席ゝ着たれど是より何といひ出して昨夜の禮をしたものと心配するも此席の樣子を少しも知らぬ身にゝ左もころわらめと察せしか仲居ゝ再びやつて來てサア此方へと小半の部屋へ案內すれゞ行信ゝ小半に向つて慇懃に昨夜の禮を演了り是ゝ甚だぶしつけおがら今日參つたゝるしばかり何卒受納して下されと持參せし土產物を小半の前へ差置て又丁寧に述られしに小半ゝほと〳〵當惑したと見ゐ是ゝとばかり挨拶も疾にゝ出來ずにゐたりしが赤らむ顏を漸もたげさしたるお世話もしませんに改まつて此樣おお禮を頂戴しまーてゝ却つて恐れ入ますが切角の思召も有難く頂戴をとい.ふも苦しき思ひ入れとも此方ゝ知らぬゞ喜んで夫で拙者も安心いたした然らゞ直に歸宅いたすと衣紋つくろひ行信が立に掛るをハッとゝ思へど偵にモシとも留め兼只今お茶をと氣を揉む處へ樣子を知らぬ例の仲居が大きに遲くありましたサアお誂へを貴郎うらヤアお



一ッと取て出す猪口をしぶ〳〵取上て二盃三盃重ねーも廓のあらひで飲ねバと思ふ心に行信が遠慮しながら飲出したので小半ハホッと息を吐き夫より勉めて打解て世間の噂嘶しから浮川竹此勤めの事を悲しさ可笑さ取交て語り出つゝ倶々よいと忍切にもてなすも忘耳新らしき嘶に紛れッとうか〳〵と行信も思ハず酒を飲過ー寝るとハなあに肱枕いつゝ其儘寝入りしがフト目が覺て吃驚し慌てゝ身をバ起さんと傍へを見れバコハ如何にハヤ行燈も有明の影はの暗き屏風のうちろの身ハ小半の手枕に添臥なしてゐたりしかバ扨ハ今のハ夢にていといよ〳〵驚く行信此顔を見詰て小半ハ打笑み必らず見捨て下さんすなへ世の俚言よいふ通り悪い道にハ入り易くさしもに手堅き行信も小半が一時の執成を嬉しく思ひし處から禮に行しが縁とあり昨日の遠慮ハ今日の無沙汰思へバ益なき事をしたと其後ハ義理ある妻のお菊が切なる意見を耳にも掛ず勤向さへ打忘れ毎夜の樣に小半の許へ通ひ詰るに業父母ハ見下果たる渠の擧動斯てハ所詮家の爲娘の爲にもならないと實家へ厳ーく掛合て遂に離縁の願ひも濟み行信ハ面目ぶげに中里家へ戻りたれど小半の事ハ忘られず尙も繁々通ひし揚句無分別にも父の所有金四百圓餘を持出ーて其まゝ盤倉へやつて行き小半の前を程よくつくろひ首尾よく身受れ嘶しを濟せ此上ハ天下晴れ立派に家を持べきだが以前の養家の聞ねもあれバ暫らく爰で辛抱してと麹町貝坂邊のある裏家を借受て思ひ合たる小半に行信よろの見る目も羨まーき迄いと睦まーくーてゐるとハ疾く兩親が聞込しも詮議立ーて騒いでハ却つて家の名折になると知らぬふりーて捨て置父の心ハ兎に角に女心に母親の嘆きハ左ろと抑量られぬ斯て幾日かすぎー折中里かたの中の口へ入品ものでー賤ーからぬ若き婦人が尋ねて來て仔細あつて爰にてハ私の名前ハ申されませんが内々にて奥樣へ一寸お目に掛りたく此よー宜ーく御披露をといふに近

来住込だ下女い不審に思ひながら餘儀なく斯と取次げば内儀い何やら考へて何い兎もあれ客の間へお通し申せといふがまに〳〵座敷へ通す程もなく唐紙を開て立出る内儀と顔を見合せて婦人いクッと泣臥せば此方もハッと驚いてどうして一人で爰へいと席へも着ず暫時の間立いしが行信は母親い漸傍へ座を右て人おも連ず只一人市ケ谷らお在といい心掛りお其方の素振假令次男い引取るとも元より赤の他人でおい私とお前の間柄遠慮いひいらぬお菊どのどんな用かい知らおいが早く嘶してお聞せといいれてお菊い雨と降る涙を漸振拂ひかう申したら未練な女とさぞお笑ひ遊ばしませうが行信様は今度の仕末もお側に居ます私が畢竟お世話の届かぬ故に心得違へをなされた譯就てい夫等のお詫を兼又私の心中を明してお嘶申たれば貴方さまのお計らひで行信様に今一目どうぞ逢せて下されと袖に縋つて泣付れ一度所天と定めたる男と思へば那様お放蕩者にあつたのをも愛想を盡さず行信の跡を慕つて尋ねて來たう殊勝お者よと母親が内心嬉おく思ふにつけ又思ひ出す我子の事心操さへ縹致さへ是程立派お女をば妻と定めて居おがら人もあらふに泥水の中に咲たる仇花に心を移すはみならず賊に均しき所業をして親に苦勞を掛るとい冥理を知らぬ白痴者お菊の手前も面目ないと暫しい返答も出來ずにゐたが思ひ返して涙を呑込み次男が斯る不所存を恨みもせずに今一度逢て嘶おがしたいとの其方の優い心体を聞ては私が頼んでも渠に逢て貰ひこうすれ決して拒む譯はなけれど逢せたいにも行信には親父の金を持出してといふにアナヤと驚くお菊夫では若やろの儘にオヽ其驚きも道理千萬行方知れずになつたのを跡で知つたる私の仰天憎らしいやら悲しいやら夫うら後は片時も安き心も泣ばかり案じる母の心のうち想像てと咽返り座にも堪らず泣臥せばエヽ遅かつた〳〵かういふ事と知つたならお別れ申た翌日にもお目に掛りに來たもれを然と

てはまた餘まりな短氣お事をと狂氣の如く身を震はして嘆きーがお菊は何か心のうちフト氣の付た事がありーか俄かに貌を改めて斯てはお目にも掛らねバ家で心配せぬうちに私は直に歸ります此上は只御身を大事に寒さ暑さの時候をバ隨分お厭ひ遊ばせと跡に心は亂れ髪引るゝ思ひを振切て別れを告るに母親も勵まされて身を起ーろんなら最早歸りやるゝ書とはいへど一人路心を付て行たがよいと見送る親母送らるゝお菊が心は千萬無量互ひに名殘お惜みつゝさらばと漸々別れーゞ其日も暮て翌日れハヤ日暮に間もなき頃市ヶ谷なる細川方のら急用とーた書面のありーを何事あらんと封じめを開る間遲しと中里の母ゞ手に取り讀下せバナヨ〳〵娘お菊事昨日宿へ斷りなしにお宅へ參つて戻つた後家出をなされた行信どのゝ行方をお尋ね申す迄は不孝ながらも身を隱すとの遺書いたーて何れへか出掛ー儘餘ゝ次の卷を見て知り玉ふべし

雛の菊初編の上終

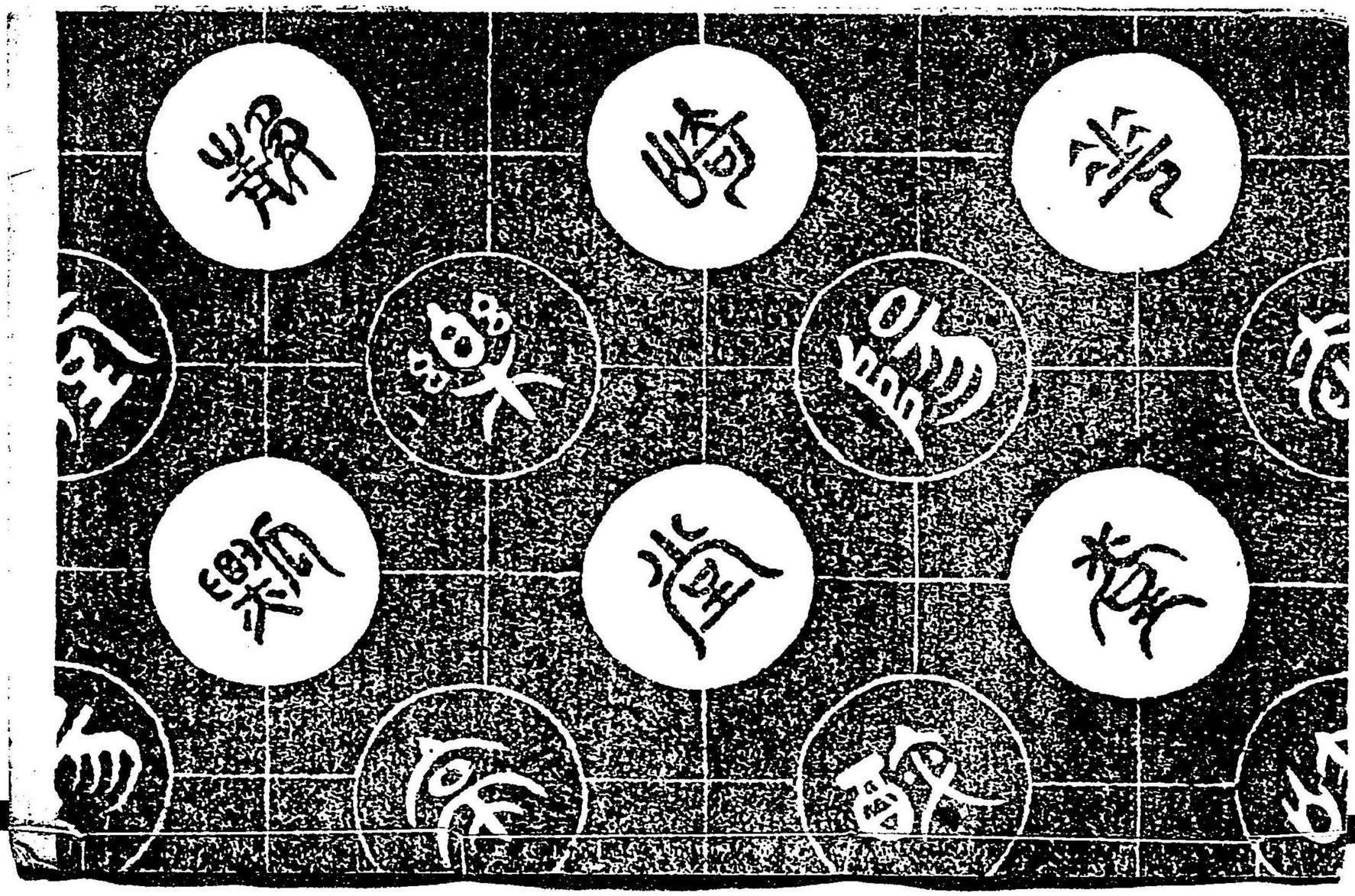
長術右門 桂川實錄新話 近刻 横濱尾上町壹丁目 崎陽堂

花鳥草木畫帖 近刻 同 辨天通四丁目 樂靜堂

開化詩酒題詩題 同

戀潘衣春雨日記 近刻 同

文狂奇帆 近刻 同

雅俗一新用文 同

英吉利言葉 同